四　内　蒙　回　顧（一）―木のない街―

昭和十四年の五月であった。仙台にいた私は、大蔵次官から突然電報を受取った。至急上京せられ度いという要請であった。

当時の大蔵次官は大野竜太氏であった。翌日東京についた私は恐る恐る次官室に大野氏を訪ねた。大野次官は、山際秘書課長（現日本輸出入銀行総裁）と同席で、「ともかく三人で飯を喰いに行こう」と言い出した。何のことやら分らぬ私は、狐につままれたような気持で素直にお伴した。何でも芝公園の入口にあるとある割烹店に連れて行かれた。食事も略々済んだ頃大野次官は、こう言い出した。

「君一つ支那の方に行ってくれないか。今度政府で、北京、上海、張家口、厦門の四カ所に、興亜院連絡部を設ける事になった。各連絡部に大蔵省からそれぞれ人を派遣することになっているが、君には張家口に行って貰いたいのだ。張家口というところは、夏は涼しく冬は暖かいし、どちらかといえば住みよいところだ。それに、君が行けば、内蒙の大蔵大臣のようなもので、白

紙に絵を書くように何でも仕事が出来る。若い時には方々を見ておくものだ。どうだ一つ聞いてもらえないか」と。

私は、これは大分おだてられているなあと思ったが、御馳走になった手前、即刻お断りすることも出来ないので、

「一つ考えさせていただきましょう。家族の者とも相談の上、後日御返事を申上げます。」

と答えて辞去した。帰り途大きい支那の地図を買って、張家口の立地を調べてみたり、まだ見ぬ支那大陸に想像を逞うしたりしたが、結局、「若い時には方々を見て置くことだ。北京や天津には、既に友人も先発して行っておることだし、淋しくなれば北京に出かけることも出来る」と思い直して、翌日、仙台にいる家族と相談することもなく大野次官に「諾」の回答をした。

六月十五日、私は、同僚の友人数人と家族とに送られて、東京駅を立ち、単身任地に向った。

橋本竜伍、石原周夫両先輩が、特に親切にしてくれたのが嬉しかった。尤もこの二人は私を張家口に出向させた張本人であったようだ。途次京城に大野政務総監（橋本竜伍氏の岳父）を訪ね、橋本さんから預った一幅の画を届けて京城に一泊し、平壌、奉天、北京を経て、張家口に着いたのは六月二十日の夕刻であった。

張家口は、一口に言えば、土の都であった。木というものは殆んど見られない土一色の田舎街

であった。日本旅館に旅装を解いたが、「えらいところに来たものだ。大蔵次官の甘言に騙されたようなものだ」と思って、はるばる朔北の地に来たことを怨めしく思った。それに水が乏しく、且つその水も硬度が二、三十度という礦水のようなもので、折角もって行ったリプトンの紅茶も、全く味が違ってしまう始末で、腹をこわすことが多かったのには困った。

蒙彊地方は、もともと関東軍が占領したところなので、東京では、大きく支那の一部として取扱っていたが、現地においてはむしろ満洲の一部として取扱われていた。軍は東京の出先であるより先に新京の関東軍の出先であり、蒙古政府の要員は、殆んど満州国政府から派遣されて来た人々で、おしなべて協和会服を着ている始末であった。

そこへ、東京からわれわれは派遣されて来たものだから、現地の日本人は、軍をも含めて、われわれ日本政府の役人を白眼視し、客分扱いにした。当時の連絡部長官は酒井隆中将（後で南支那派遣軍司令官となり終戦後は中国で戦犯として処刑された）であって、私はその下で経済課長をしていた。酒井長官も軍との摩擦を極力警戒されていたが、唯当時の物動計画と対支投資計画という線に乗った仕事は、われわれを通さないと、東京が受付けてくれないので、仕方なしに、軍もわれわれと協力するし、現地政府の連中も私のところに頭を下げに来たものだ。それにしても筋が通らぬことが多かった。竜烟鉄鉱株式会社や大同炭鉱株式会社を、日蒙合弁で設立したの

は、その当時であったが、この両会社の監督をめぐっての諒解事項などは、こうした内蒙の奇形的な性格を反映して、随分おかしなところがあったし、その役員人事などは、東京と新京との板挟みになって、どうしてもすっきり決めることが出来なかった。

占領軍は、当時蓮沼蕃（中将後の大将）を司令官とし、田中精一少将（後の中将）が参謀長であった。当時軍は五原作戦その他の作戦や、治安の維持に当っていたが、同時に政治にも、経済にも、事実上最高の権能を駆使していた。大野次官が「白紙に画を書くように仕事が出来る」といわれたが、事実は身動きも出来ないように、実権は軍によって掌握されていた。これは占領地だから或る程度已むを得ないことであったが、軍人の中には相当思い上った横柄な人もいて、決して感じのよいものではなかった。それにしても、かようなことは軍人だけを責める訳にも行かない。権力の具体的表現である参謀肩章に跪坐して、事の軽重善悪をわきまえずに、軍人に追従し、或は逆にその権能を利用しようとする役人や民間人が、当の軍人に劣らない責任を負うべきであると思った。

尤も軍人にも学ぶべきところが多くあった。物事の判断が、役人や商人の場合には、どうしても専門に捉われ勝ちであるが、軍人の判断には、専門家に見られない全局的判断が間々見られた。又だらだら小田原評定をするということが軍人は嫌いで、どの問題についても、必ず一つの「判

決」（彼等は書類の最後の結論にこういう言葉を使った）を求めた。又人格的にも玉のように澄み切ったいい人があった。終戦後の反動として一概に軍人を悪くいうのには、私はくみし難いのである。（昭、二八・八）

五　内蒙回顧（二）―武者どもの夢の跡

内蒙古といっても、住人の大部分は、所謂漢民族であって、蒙古人はほんの僅かしかいなかった。内蒙古の日本の占領地において漢民族が約七百万人、蒙古人は約三十万人といわれていた。この漢民族の統治に当る人として、蒙古人たる徳王を推したのであるから面白い。

徳王さんといえば張家口から外蒙の二連に通ずる道路に沿って、西ソニットという村邑があるが、その地域に君臨する王族であった。家柄としては、内蒙第一等というわけでもなかったらしいが、蒙古自治政府の主席にかつがれた。蒙古には、包（パオ）といって、テント張りのような丸い家が多いが、徳王さんの家は、日本のお寺のような構造の立派な固定家屋であった。私は或る日、張家口から、スーパー五人乗りの小さい飛行機で、徳王さんに案内されて、その王府の客となり、羊や馬の乳で造ったお酒を御馳走になった。徳王さんと御令息が出て、随分歓待してくれたが、

私は始めて、徳王さんが、酒豪であることを発見した。というのは、張家口での宴会では、徳王さんは、殆んど僅かしか酒を飲まれなかったからである。按ずるに、少数民族の王者として絶えず生命の危険を肌身に感じさせられているので、自宅以外での深酒は慎んでいるのだと事情通は話していたが、少数民族にはわれわれが理解できない苦労があるものだと思った。

内蒙古地帯は何といっても農業地帯で、小麦その他の雑穀、ケシ等という農産物の移出地帯である。農産物を華北地方に移出して、華北からは生活必需品を移入している。従って、この地帯の経済、特に、金融、物価、税制、為替等を論ずる場合には、何としても、農業を主とした経済の構造を頭において考えなければならない訳だ。ところが、東京でも、現地でも、日本人は稍々ともすれば蒙彊といえば、この構造を抜きにして、竜烟の鉄鉱、大同の石炭に配するに、蒙古人の遊牧にちなんだ牧畜を以て、この地帯の特徴であると決めこみ、凡ゆる施策がここに重点を置かれていた怨みがあった。そこで、私は、現地の蒙彊新聞に二面又は三面抜きで「蒙彊経済を裸にする」という論文を掲載して、聊か啓蒙の資に供したこともある。又朝日や毎日というような大新聞の大陸版にも、同じ視角から対蒙政策を論じたことがある。

更にもう一つ経済政策を考えるべき場合に、忘れてはならないことは、占領地の経済一般に通ずることではあるが、それが「対敵経済」であるという立脚点である。対敵あるいは、臨戦の経

済においては、何よりも治安の維持を第一とし、利敵にならないような配慮を寸時も怠ってはならないわけである。ところが東京は、依然として、馬鹿の一つ覚えのように、低物価政策を堅持して、この対敵経済に臨んだものだ。例えば、炭価、塩価、運賃、電気料金、電信料金その他あらゆる物資とサーヴィスについては、終始低物価を主張し実行して来たのであるが、その結果は、日本側の把握している石炭、塩、鉄道、電気事業、電信事業にだけ低物価政策は実行されて、日本の行政力が及ばないところ、つまり現地人の経済圏では一向に実行されなかった。低物価の恩恵は敵を利したが、敵地から購入する農産物等は、極めて高価なものについて、味方を苦しめたのである。現地にいて、私は、東京の頭の悪さ加減というか、政策に弾力性の乏しいというか、そういうことに公憤を禁じ得なかったのである。

張家口は、さきにもいった通り、木のない土の街であるが、大野次官がいわれた通り、夏は涼しい代りに、冬はどうした加減か、北京や天津より寧ろ暖かであった。そういう意味で住みついてみると、悪いところばかりではない。しかし私が、一人の旅人としてでなく、この土地に住んで落着きを感じかけたのは、その年の十一月末頃であった。

十一月の始め、私は、三台のトラックにガソリンを一杯積んで、九名の部下を引率して内蒙古の蒙古人地帯の戸口調査に出掛けたのである。トラックで果しない草原を二、三時間位の行程を

行くと、小さい部落に辿りつく。途中、狼がトラックを追かけてくることもあった。

部落に辿りつくと、車を捨てて一戸一戸包を訪れ、家族の状況や財産の状況（羊が何頭、牛が何頭、馬が何頭等という風に）を調べるのであった。夜がくれば、テントを張って寝ることもあれば、蒙古人の包に賓客となることもあった。ラマ廟を訪ねては生仏に会ったり、その祭事を見物したりもした。そして九日間草原地帯を歩いたが、十一月というのに、もう極寒の寒さであった。そして一応調査を終えて、張北から張家口に帰ったのであるが、張家口の灯がチラチラ見えかけた時は、私はまるで東京の灯が見えたように懐かしくもあり嬉しくもあった。それからというものは、不思議にも、朔北の僻地だと思った張家口が、私にとっては一応文化の圏内にある街であったのだと思われ、ここに勤務することを別に苦労とも思わないようになったのである。

「夏草やつわものどもが夢のあと」というのは芭蕉の句であるが、内蒙古の夏は、今でも青い草原にケシの花が咲き乱れていることであろう。内蒙生活の思い出は尽きないが、凡ては一場の夢であった。顔馴染の徳王さんはじめ現地の人々の顔又顔が眼底にちらつくが、中共治下で、彼等は一体どうして少数民族の生存を続けていることであろうか。（昭、二八・八）

六　臨戦経済の錯倒

昭和十五年の十月、私は内閣から帰朝命令を受けたので、蒙古から満洲各地を旅行して東京に帰ってきたのは十月下旬であった。私の新しいポストは、東京の興亜院経済部において、対支投資計画を立てたり、その実行を監督する仕事であった。具体的にいえば、北支那開発株式会社と中支那振興株式会社という二つの投融資会杜の監督とこの二つのパイプを通して、その両全社から投融資を受けている日支合弁会杜の予決算、事業計画、重要人事等を調整することであった。

日本の行政権は、日本の特殊法人たる北支開発、中支振興の二会杜には及ぶが、現地法人たるその子会社には及ばなかった。そこで政府としては、この二大親会社が、子会杜に投融資する場合の契約を紐として、子会社に対する事業上の指導と監督の手を間接的に伸ばしていたわけである。かような会社の数は鉱山、鉄道、港湾、運送、塩業、電気、電信電話、等数十に及んでいた。

北支開発及び中支振興は、軍閥の指導下にある日本帝国主義の対支侵略の軸心であるとして、終戦後は手きびしい非難を浴びたが、これは事実の一面をカバーするにすぎない公式的非難であ

ると思う。事実、この二大投融資会社の傘下にある各事業は、現地日本軍に物資及びサービスを提供する大きい役割を果していた。会社経営からみて、この役割は、相当大きい比重を占めていたし、又会社が軍に提供する物資やサービスの価格は、一般民需に比べて非常に安く、その原価をカバーする程度であればよいが、事実はそれを下廻る場合もないではなかった。そういう意味で、対支侵略の手先だといわれても返す言葉がないわけだ。

しかし、そうとばかりきめてかかるのは、聊か酷である。これらの会社の事業計画は、軍需の充足を頭においていたことは当然であるが、同時に現地及び内地における民需の充足にもかなりの重点をおいていた。又長期に亘って、支那経済の基盤の充実やその経済力の発展に寄与したいという素直な構想を併せもっていたことは事実だ。特にタンクーの港湾の建設の如きは、蔣介石が、日本人の残してくれた偉大な功績であるとして絶讃を惜しまなかった程の大土木事業であった。他面内地の戦争経済に寄与することも、同時に考えて実行はしていたものの、支那における経済開発は、満州におけると同様に、それによる日本の輸入よりも建設資材の輸出の方が多く、相当大きい持ち出しの形になっていたことも否めない。

それは、ともかくとしても、支那の重要な生産施設や輸送施設が破壊されることもなく良心的に維持され改良されたこともまた事実である。日本人が、かつて朝鮮や台湾の植民地経営に示し

た実績は、到底、英国人や仏蘭西人の比ではないといわれているが、満洲や支那の開発についても、そのことはある程度うなずけることではあるまいかと、私は思っている。今日の印度やインドネシアが、西欧先進国の永い統治下にあって、一向に民度が上らず、経済の構造が高度化されず、文化の水準が高められていないという事実は、西欧人が、「自国の利益」を植民地経営の至上命令としていたことを物語っているものと思われる。われわれ日本人は、彼等のように、自己本位ではなかった。又自己本位になりきれない国民性に恵まれていたのだ。

当時の興亜院は柳川平助中将が長官で、鈴木貞一氏（陸軍中将、後の国務大臣）が政務部長、日高信六郎氏（後の駐伊大使）が経済部長であった。この他に文化部と技術部があった。各部の課長以下の職員は、夫々その専門に応じて、陸海軍よりは勿論各省からも派遣されていた。今の各省の上級幹部の中には、その当時興亜院でわれわれと一緒に机を並べた連中が極めて多い。唯陸海軍の角逐の余波をうけて、つまらぬことに煮え湯をのまされた場合もあるが、概して、各省は克く対支政策に協力の実を示したものである。

当時、各省から出ていた若手の事務官七人が集って一つの会を作った。竹林の七賢にちなんで、私が提唱して「七賢会」と名づけ、大いに友交を重ねたものだ。この会はその後すぐ九人になって、現在では「九賢会」と改名して、旧交を維持している。こうした友情の連鎖が、各省の行政

の対立と不調を克服した効果は相当あったと思う。同じ釜の飯を喰うということは、人間にとって親近の情を増すことになるものだ。

興亜院には総理大臣、陸、海、外、蔵、各相を以て組織された連絡会議というのがあって、日本の対支政策の策定に当っていた。その事務局は、連絡会議の幹事会といって、興亜院政務部長、陸海軍の軍務局長、外務省東亜局長、大蔵省理財局長がその幹事となって、随時連絡調整の仕事をしていた。ところが、陸軍は常に北支に重点を置き、海軍は何時でも南支に力点を指向し、中支は両省の緩衝地帯であるという具合であった。このことは、日本の対支政策にブレーキをかける恰好になったが、同時に相互の牽制にもなって、対支政策の偏向や行き過ぎを抑制する役割を果したともいえよう。北京、張家口、上海、厦門の各現地連絡部の人的構成や施策中にこの二つの流れがありありと現われていた。われわれ文官は、その両省の中にあってできるだけ中道を歩むことを心懸けていたわけである。

北支開発、中支振興という二つの投融資会社の組織と機能とは、私の決して満足の行くものではなかった。事実、現業を持たないで投融資だけの仕事をするのだから、どこかしっかりした銀行にやらせればできる仕事であった。ところが事実は、両者共比較的多数の要員を抱え、賀屋興宣、津島寿一、児玉謙次等大物の総裁を推戴していたところに若干の無理もあり、同時に率直に

いって無駄もあったと思う。しかしこれは、両社の罪のみに帰するわけには行かないので、大部分は政府の責任であった。官僚の経済における感覚の甘さと政府の企画の非能率性を見逃すわけには行かない。

対支政策の企画や立案が、全体として、近視的であったことも付言しておかねばなるまい。それは漢民族に対する「民族政策」でなければならなかったのに、日本人の独り相撲の憾みがなかったとはいえない。又世界大の視野から、米英やソ連の思惑や期待も十分勘定に入れておかなければならなかった筈だ。この点については、わずかに外務省が若干の抵抗を試みたとはいうものの、その主張は、強さと勇気を欠いた憾みがあったといえよう。

大東亜戦争の先駆となった支那事変の処理は、結局、第二次世界大戦に吸収され埋没されてしまって、その功罪を切離して論ずることができなかったが、その底を流れる基調そのものは、大東亜戦争における失敗の素因と軌を一にしたものであったと思う。それにしても、対支政策はわれわれ国民にとって、高い授業料ではあったが、又貴い民族的試練であったことは否めまい。

（昭、二八・八）